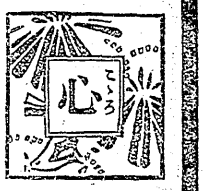

漱石　心　先生の遺書

（一）

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此處でも先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々々しい頭文字抔はとても使ふ氣にならない。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非來いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛る事にした。私は金の工面に二三日を費した。所が私が鎌倉に着いて三日と經たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつた。けれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから國元にゐる親達に勸まない結婚を强ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の當人が氣に入らなかつた丈で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした。私には何うして可いか分らなかつた。けれども現實に母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで彼はとう〳〵歸る事になつた。折角來た私は一人取り殘された。

學校の授業が始まるにはまだ大分日數があるので、鎌倉に居つても可し、歸つても可いといふ境遇にゐた私は、當分元の宿に留まる覺悟をした。友達は中國のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、學校が學校なのと年が年なので、生活の程度は私と左さう變りもしなかつた。從つて一人坊ちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒も有たなかつたのである。宿は鎌倉でも邊鄙な方角にあつた。主突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い暖を一つ越さなければ手が屆かなかつた。車で行つても二十錢は取られた。けれども個人の別莊は其處此處にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴を遣るには至極便利な地位を占めてゐた。

私は獨り海へ這入りに出掛けた。古い極ぶり返つた繁昌の間を通り抜けて磯へ下りると、此邊にそれ程の都會人種が住んでゐるかと思ふ程、靜寂に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が發湯の樣に黑い頭でごちやくしてゐる事もあつた。其中に知つた人を二人も有たない私も、埒のいふ賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寢そべつて見たり、膝頭を波に打たして其處いらを駈け廻るのは愉快であつた。

私は晝に先生を此鎌倉の間に見付出したのである。其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不圖した機會から其一軒の方に行き慣れてゐた。長谷邊に大きな別莊を構へてゐる人と違つて、各自に專有の着換場を有へてゐない此處いらの避暑客には、是非共斯うした共同着換所といつた風なものが必要なのであつた。彼等は此處で茶を飲み、此處で休息する外に、此處で海水着を洗濯させたり、此處へ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盜まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脫ぎ棄てる事にしてゐた。

（一條家に縁故ある）

函谷鉾の稚兒　▽其名は嘉多丸

函谷鉾は元來生た稚兒であつた、處が天明の大火で鉾は全部燒失して其後は容易に再興が出來ぬ、尤も同町は北側は民家であつたが南側は阿波の屋敷、町内の者が鉾の再興を企てゐても何分費用が澤山入るので其力が及ばぬ、年々祇園會が來ても町内から鉾を出す事が出來ぬ、都の花とも稱へらるゝ祇園會に鉾を出す事の出來ないのは町内に取つては如何にも殘念、何とかして鉾を遣らうと思つたが幾年經つても其志を達する事が出來なかつた、漸くにして再興の出來たのは燒失後丁度五十年目即ち天保八酉年で、函谷鉾が五十年目に再興したとて其函谷鉾諸にも唄はれた位

さて此再興の動機は町奉行から頒に神事の奨勵があつた、夫で同町でも若衆して鉾の再興を企てたが其鉾の金具に就て鉾の長を探り短を捨て、遣つた他の鉾に比べては新しい代りに總じて他所の鉾に比べては新しい代りに總じて他所の鉾に比べては新しい代りに總じて他所